

証言による『南京戦史』(4)

46期 敵本 正巳



三、秣陵関・方山・將軍山・雨花

台方面(114D)の戦闘(114D参謀)

長・磯田三郎大佐25期の手記による)

第百十四師団は主力(秋山充三郎少将の指揮する歩兵第百二十七旅団基幹)をもって、漂水一秣陵関一將軍山一蘇田橋道を、一部(奥保夫少将の指揮する歩兵第百二十八旅団(一部欠)をもって、漂水一湖熟鎮一方山一將軍山東側一蘇田橋東側道を、それぞれ南京城外に向かつて追撃した。

秣陵関付近の戦闘 師団追撃隊の先頭である歩兵第百五十聯隊第二大隊は、12月7日未明、李村北方の微弱なる敵を撃破したが、秣陵関南側より張山にわたり堅固に陣地を占領し、多数の機関銃、迫撃砲を有する千内外の敵陣地に遭遇した。当時、師団主力はその先頭をもって埭口鎮に到着していたが、師団長はこの状況を知り、大要次のように部署した。

秋山旅団(II/150i, 102i(III欠)、機関銃隊、歩兵砲隊)は、歩兵第百二聯隊(第三大隊欠)をして、西南方より張山を攻撃して敵の退路を遮断せしめた。一部をもって秣陵関の敵を攻撃させた。また、騎兵大隊主力および歩兵第六十六聯隊第二大隊を迂回隊として、埭口鎮一陶具鎮道を敵陣地の外側より迂回させた。そして、歩兵第六十六聯隊、戦車第五大隊の軽装甲車隊を左追撃隊として本道に沿う地区より、歩兵第百五十聯隊第一大隊(二中隊欠)を右追撃隊として、東方クリークに沿う道路方面より、直路敵を急追する態勢を

とらせた。 歩兵第百五十聯隊第二大隊は午前10時頃、秣陵関に突入し、抵抗する敵を駆逐しつつ前進。この間歩兵第六十六聯隊第一大隊は秣陵関以西に増加して攻撃に参加した。正午過ぎ第一線は秣陵関西北端水流の線に進出したが、対岸およびその後方台地には、重・軽機関銃を有する敵が陣地を占領し、橋梁付近は敵の集中火をうけ、かつ橋梁は炎上中であつた。

第一線大隊は重機関銃、歩兵砲を橋梁入口に近く配列して敵火を制圧し、その援護下に橋梁の消火につとめ、民家の戸板を橋の上に敷きつめて応急修理し、午後4時頃、歩兵第六十六聯隊第一大隊、軽装甲車隊は橋梁を突破前進した。敵約二千は縦隊となつて退却したが、この敵を蹴散らしながら夜に入るも追撃を続行し、午後8時頃には高家庄に進出した。

この間、左迂回隊は所在の敵を撃破しつつ陶具鎮より北進し、騎兵隊は金家村西方台地に、歩兵第六十六聯隊第二大隊は午後3時頃東善橋付近に進出し、同地付近を占領する約千名内外の敵を攻撃して、午後7時頃、高家庄西方台地に進出した。 本日の戦闘における敵の遺棄死体は二百を下げ、捕虜三十三名(うち将校三名)、おが方の損害、戦死三十四、負傷八十八、戦傷死九名であった。

【注】 第百十四師団編成(宇都宮) 師団長 末松 茂治中将 14期

歩兵第百二十七旅団

旅団長 秋山充三郎少将 18期

歩兵第六十六聯隊

聯隊長 山田 常太中佐 24期

歩兵第百二聯隊

聯隊長 千葉小太郎大佐 21期

歩兵第百二十八旅団

旅団長 奥 保夫少将 17期

歩兵第百十五聯隊

聯隊長 矢ヶ崎節三中佐 27期

歩兵第百五十聯隊

聯隊長 山本 重省中佐 26期

騎兵第百十八大隊

大隊長 天城幹七郎少佐 27期

野砲兵第百二十聯隊

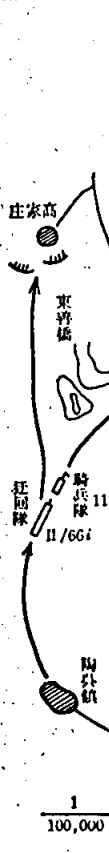
聯隊長 大塚 昇中佐 25期

工兵第百十四聯隊

聯隊長 野口勝之助少佐 27期

輜重兵第百十四聯隊

聯隊長 中島 秀次少佐 26期



秣陵関付近戦闘経過要図 (12月6日)

方山東方地区の戦闘 歩兵第百二十八旅団主力(奥少将の指揮する歩兵第百十五聯隊基幹)は12月6日漂水を時頃、秣陵関に到着して師団主力に復帰し、途中橋梁を修理しつつ前進し、午後2時頃、秣陵関に到着して師団主力に復帰し、

出発し、湖熟鎮付近の敵を駆逐して、同日午後5時頃、咸田北方のトーチカに拠る堅固な敵陣地に遭遇した。旅団長は、堅固な敵陣地に拘束されることなく、下黄墅方向より穿行的に夜間追撃するに決した。午前3時半頃、行動を開始し、7日黎明までに西郷付近に進出し、前面の上黄墅付近線にある既設陣地の敵を攻撃して主力は同日夕刻、上黄墅付近に進出することができた。 しかるに、方山東西の線(李家辺一杜家山一下黄墅)には、トーチカを有する堅固な敵陣地があり、敵は頑強に抵抗して、戦況は意の如く進展しない。旅団長は夜間攻撃を続行し、さらに8日昼間も力攻したが、依然として攻撃は進捗しない。 8日正午や前、無線により「上海派遣軍と第十軍間の作戦地境が変更され、師団は速やかに南京南方の雨花台東方地区の戦闘に参加すべき」命令に接した。 よつて旅団長は、同日日没を待って戦場を離脱し、方山東側地区より西南方の秣陵関を経て、師団主力に追及するに決し、転進を開始した。9日未明、竜都鎮西方クリークに架橋し、途中橋梁を修理しつつ前進し、午後2時頃、秣陵関に到着して師団主力に復帰し、

た。 將軍山付近の戦闘

師団は7日夜間追撃を行い、高家庄付近に
進出したが、左連撃隊(66i基幹)および迂
回隊(118K大・II/66i)は、8日払曉より
前面、左右両側の高地の敵から急襲火をう
け、追撃砲弾も飛来し、敵の抵抗は漸く大なり
ものと判断された。

ここにおいて師団長は、將軍山を中心とす
る敵の抵抗は真面目なるものと判断し、一一
四師作命甲第五十五号、同第五十六号によ
り、8日朝、大要次のように部署した。
すなわち、歩兵第六十六聯隊主力を右第一
線として東方より、秋山少将の指揮する歩兵
第二百聯隊主力を左第一線として西方より、
ともに將軍山の敵を包囲するように攻撃を命
じた。

攻撃方向を誤り、第六師団と交錯す——第
一線聯隊は、夜間に戦場に進入して付近の地
形を十分認識せず、敵の射撃に牽制されて攻
撃方向を誤り、歩兵第六十六聯隊は蔭樹村方
向に、歩兵第二百聯隊は楊山・斗山方向に攻
撃し、8日夕刻には敵の戦線内に深く進入し
た。

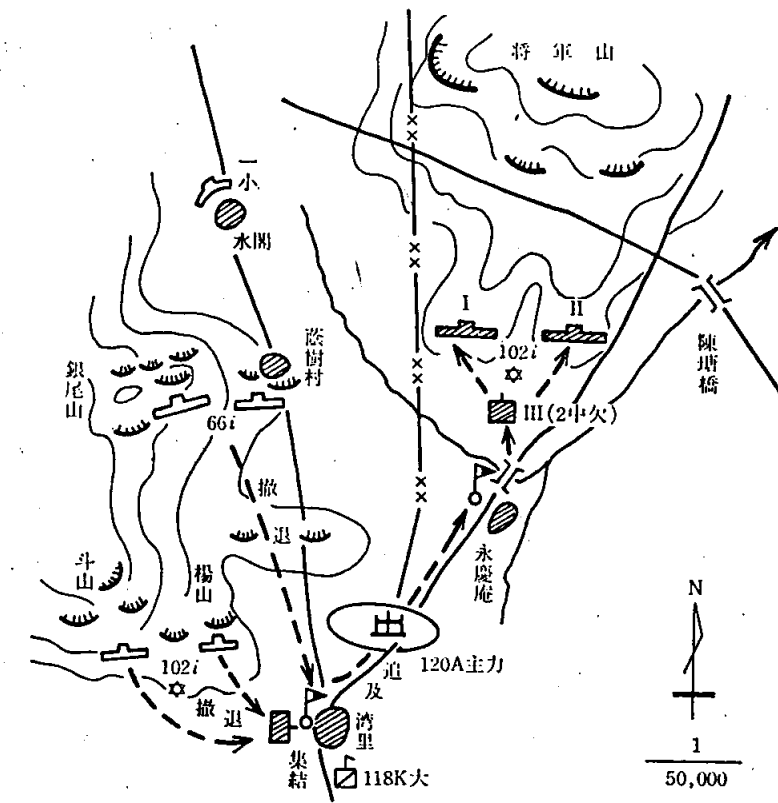
8日正午頃には第六師団の先頭部隊(13
i)ついて歩兵第四十五聯隊が戦場に到着
し、野砲兵聯隊も湾里付近に陣地を占領し
て、第一線の攻撃を支援した。

このように両師団の先頭部隊が、同一戦場
に混交して到着したので、両師団參謀長は直
接会見して協議し、作戦地境を將軍山西端の
周家村西方約五百メートルの無名部落—南京
中華門の線に変更した。

ここにおいて師団長は、歩兵第二百二聯隊を
直ちに兵力を徹して湾里西北方地区に集結せ
しめ、永慶庵付近に展開して9日払曉より將
軍山方向に攻撃を命じた。ついで歩兵第六十
六聯隊も戦線を離脱して、湾里付近に集結し
師団の直轄となった。

このようにして、楊山・斗山方面の戦場は
第六師団に譲り、師団は右に転位して將軍山
正面の戦闘に専念することとなった。

將軍山付近戦闘經過要図(12月8日~9日)



將軍山にたいする攻撃——9日未明より秋
山旅団(102i基幹)は、機関銃・追撃砲を有
するトーチカ陣地にたいする攻撃を開始し、
湾里北側に陣地占領した野砲兵第二百聯隊
(一大隊欠)は、この攻撃を支援した。

將兵の決死の攻撃により戦況は進展し、同
日夕刻には將軍山南麓に進出し、10日未明よ
りの攻撃を準備した。この夜、方山方面より
転進した奥旅団は師団主力の掌握下に入っ
た。

しかるに、夜に入り当面の敵は退却の敵が
見られたので、一一四師作命甲第五十八号に
より、秋山旅団をして將軍山東側地区より蔵
しようとしたが、花神廟付近において一連の
敵陣地に遭遇し、直ちに攻撃を開始した。

これを追隨する如く部署した。本戦闘において敵に与えた損害は、明らか
でないが、遺棄死体は八百内外、多大の損害
を与えたものと思われる。わが方の損害は、
8・9兩日の戦闘で、戦死約五十、負傷約百
八十と概算された。

南京城外、雨花台方面の戦闘
歩兵第二百二十七旅団は12月9日、將軍山付
近の敵を突破して夜間追撃を敢行し、10日5
時頃、その先頭をもって林家崗付近に進出し
た。旅団は蔭樹橋—中華門道兩側地区より、
逐次兵力を前方に推進して雨花台付近に進出
しようとしたが、花神廟付近において一連の
敵陣地に遭遇し、直ちに攻撃を開始した。

師団長は午前8時頃、蔭樹橋十字路付近に
進出したが、当時、歩兵第二百二十八旅団およ
び砲兵聯隊主力は、後方を追及中であつた。
師団長は、当面の敵は雨花台一帯に拠る最後
の抵抗陣地であると判断し、一一四師作命甲
第五十九号をもって、午前8時以降、逐次到
着する部隊を戦闘に加入させた。

秋山少将指揮の歩兵第二百二十七旅団主力
(野砲一中隊、工兵一中隊配属)は左翼隊と
なり、花神廟付近より雨花台に向かい、攻撃
し、奥少将指揮の歩兵第二百二十八旅団主力
(野砲兵一中隊、工兵第二百十四聯隊主力配
属)は右翼隊となり、周家楼子付近より周家
凹に向かい攻撃した。しかし、奥旅団は方山
地区より転進して9日夜半すぎ永慶庵付近に
到着し、引き続いて前進したのが、途中の道路
不良のため蔭樹橋に到着したのは午前9時近
くで、周家楼子に展開を完了したのは正午過
ぎであつた。

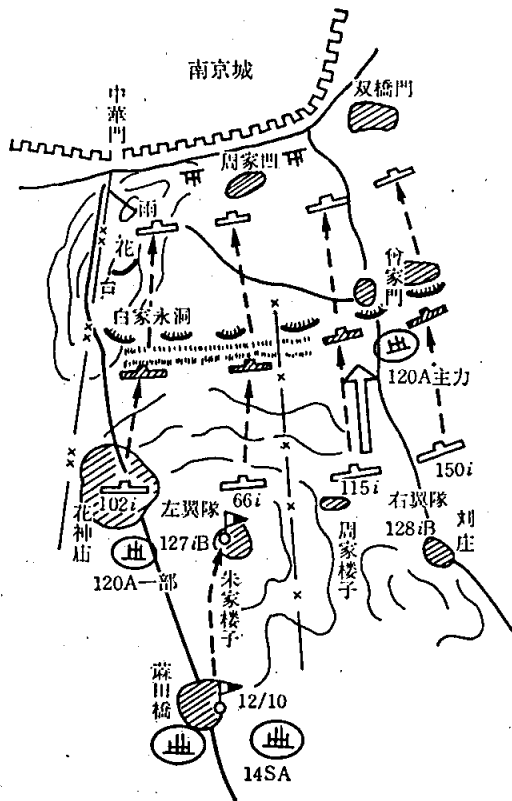
砲兵隊(野砲兵第二百二十聯隊主力、野戦重
砲兵第十四聯隊主力)は永慶庵—蔭樹橋道が
意外に不良なため、戦場に到着することがで
きず、正午頃までに到着したのは僅か數門に
過ぎなかつたが、夕刻頃までには野砲・野戦
重砲の大半が到着し、野砲は花神廟付近に、
野戦重砲は蔭樹橋付近に陣地を占領し、主と
して左翼隊の戦闘に協力した。

第一線聯隊は鋭意攻撃につとめたが、敵は
曹家門付近—白家水洞付近の線以北に數線に
わたり堅固に陣地を占領し、多數の重・輕機
関銃、追撃砲をもって間断なく射撃し、わが
前進を阻止した。10日夕刻、わが第一線は漸
く提防付近の障礙物を有する敵陣地前に近迫
することができた。

ここにおいて、師団長は重点を右翼隊に保
持するに決し、師団砲兵の主力を周家楼子付
近に陣地を占領して、主として右翼隊の戦闘
に協力させた。

第一線諸隊は夜に入るも攻撃を続行して、
逐次敵線を突破し、12日午後には周家凹、雨
花台の線に進出し、その一部は遂に城壁に突
入するに至つた。12日夕、師団は主力を雨花

南京城外の戦闘経過要図 (12月10日~14日)



台 周家門の線以南の地区に集結し、一部をもつて城内掃蕩のため部署を行った。
 南京城外の戦闘におけるわが軍の損害は、戦死二〇六、負傷六八二、戦傷死六名であった。敵の遺棄死体は約五〇〇内外である。
 13日朝、「城内の敵を殲滅すべき」軍命令に接し、師団は主力をもって城内の敵を掃蕩するに決し、両翼隊は城内に進入し、13日夕には掃蕩を完了し、14日午後、師団司令部は入城した。
 城内掃蕩にあたっては、砲兵隊は曹家門、李家凹付近に陣地を推進して、両翼隊の掃蕩に協力する態勢にあり、戦車第五大隊も城内掃蕩に協力すべき命令を受けていたが、砲兵戦車ともにその必要はなく、戦車第五大隊は遅れて中山門方面に迂回して進入したのである。

- 南京城外で押収した兵器
- 小銃 八四
 - 手榴弾 三〇〇〇
 - チェッコ軽機 七五
 - 火薬箱 三
 - 重機関銃 一
 - 歩兵砲弾 二〇
 - 迫撃砲 五
 - 自動車 三
 - 山砲 二
 - 円匙 五
 - 速射砲 二
 - 円匙 三
 - 拳銃 二
 - 十字銃 三
 - 銃剣 二
 - 電話機 三
 - 小銃実包 六、〇〇〇
 - 青電力 一
- その他、兵工廠で押収したもの
 迫撃砲、機関銃、自動小銃、馬具器具、多数にして数益不明
- 四、淳化鎮—光華門間 (9D)
 の戦闘
- 第九師団は、歩兵第十八旅団 (19i欠) を基幹とする追撃隊を先遣し、師団主力は常州—金壇—天王寺—淳化鎮道を南京に向かい追及した。追撃隊は進路上の一部の敵を撃攘しつつ、12月5日、淳化鎮東方地区に進出して

当面の敵陣地にたいし攻撃を準備し、師団主力は一日遅れて6日夕刻、紫雲鎮に進出した。
 作戦経過の概要 (9D戦闘詳報による)
 淳化鎮 (南京の南東約二十五キロ) 付近の陣地は、南京防衛の外郭陣地として一連のトチカをもつて縦深にわたり堅固に構築され、守備軍 (第八師第三軍の一五四師・一五六師) が頑強に抵抗した。
 追撃隊である歩兵第十八旅団 (36i基幹) は、敵の警戒部隊を駆逐して6日、淳化鎮付近の敵陣地を攻撃したが、大なる成果を収めるにいたらなかった。師団主力は6日夕、追及したので、歩兵第六旅団 (7i、35i) を追撃隊の右に増加展開せしめて右翼隊とし、山地方向から攻撃させ、追撃隊を左翼隊とした。また、歩兵第三十五聯隊第二大隊を基幹とする右側支隊をして、紫雲鎮—上七甲村道方面から、南京城の中山門に向かい追撃させ

た。
 両翼隊は、7、8日の二日間わたり力攻したが、8月14時過ぎ歩兵第三十六聯隊の第一線は、歩・砲・工・飛協力のもとに、敵陣地を突破し、敗敵を急追して馬鞍山南麓に進出し、該高地付近の敵にたいし夜間攻撃を続行した。この日、歩兵第十九聯隊主力が戦場に追及したので、直ちに左翼隊に増加して左翼方面より追撃に移らせた。
 右翼隊方面も8日15時頃、当面の敵を撃破して追撃に移り、同日夕刻には馬鞍山南麓に進出して、該高地の敵にたいし夜間攻撃を行った。
 両翼隊は8日23時頃、相前後して馬鞍山南麓に掘り、歩兵第三十六聯隊 (脇坂部隊) は一挙に敵中に侵入して、9日5時頃にはその第一線は光華門外のクリークの線に進出した。
 右翼隊の歩兵第三十五聯隊主力 (富山) は、9日払暁までに陸軍兵營 (中山門東南方約三キロ) 付近の敵を撃破し、さらにその後方陣地にたいし攻撃した。また、歩兵第七聯隊 (金沢) は、歩兵第三十五聯隊の左に進出して、工兵学校付近の敵にたいし攻撃を準備した。
 最左翼にあった歩兵第十九聯隊 (敦賀) は淳化鎮—光華門道以西の地区から追撃し、9日早朝には雨花台東半部の敵陣地前に進出して、その後の攻撃を準備した。
 このように、第九師団は縦長の追撃態勢をもって、淳化鎮付近の前哨陣地に遭遇し、逐次後続聯隊を戦線に加入させて、馬鞍山系の陣地を激戦の末、突破した。そして引き続く約十キロに及ぶ夜間追撃において、小丘の連なる錯雑地帯を、敵と「紛戦」「混戦」を交えながら突進し、光華門の前面に進出したのである。
 この間における歩兵聯隊の戦闘および参戦者の証言を紹介し、戦闘の実態を考察しよう。

▼歩兵第三十六聯隊の戦闘、夜間追撃 (同聯隊史より抜粋)
 師団追撃隊の先頭に立ち、所在の敵を撃破しつつ前進した歩兵第三十六聯隊 (脇坂部隊) は、12月5日夕刻、淳化鎮付近の敵陣地前に到着した。前兵の第一大隊は直ちに当面の敵を攻撃に参加し、6日薄暮ようやく第一線陣地を奪取した。
 聯隊長はさらに第二大隊を第三大隊の右に増加して、第二線陣地にたいし攻撃を準備した。この間、敵は兵力を増加し、抵抗もますます頑強となったが、わが第一線将兵は携帯口糧もすでに尽き果てて、前送される握り飯と芋とで飢えをし、肌を刺す師走の寒風と辛とにさらされながら、不眠不休で突撃準備を進めた。
 8日13時50分、砲兵は一斉に火蓋を切りついで友軍飛行機の爆撃と砲兵の突撃支援射撃に衔接して、わが第一線は敵陣内に突入した。第二大隊がまず突撃を発起し、ついで第三、第一大隊も、手榴弾を乱投して抵抗する敵に内迫して、14時50分頃には

淳化鎮西端に進出した。死傷多く疲労その極に達しているにもかかわらず、敵の逆襲を撃退しながら、第二、第三大隊は現勢をもつて上方鎮に向かい、戦場追撃に移った。第一大隊は本道上を果敢な縦隊追撃に移行し、敵に後方陣地に抛る暇を与えず、16時には早くも淳化鎮西方の高管頭に進出した。

聯隊の果敢な進出をきっかけにして、師団の第一線諸隊は相前後して同夜半、馬鞍山系の敵を駆逐して夜間進撃に移ったのである。

この頃、正面の山世村西方高地には、チエッコ機銃五、六挺を有する敵約三百名が掩蓋陣地によって猛射してきた。聯隊はこの敵を正面攻撃することなく、第二、第三大隊は本道南方に迂回して、上方鎮に向かい進撃した。

17時頃、軽戦車三輛を伴う約三百名の敵が本道に沿う地区から逆襲してきたが、配属の第一独立機関銃大隊がこれを攻撃、北側の山地方面に敗走させた。なおもわが聯隊の後方に突入しようとする戦車にたいしては、山砲の射撃によって撃退した。

20時、新たに約二百名の敵が第四中隊正面に逆襲してきたが、独立機関銃大隊の支援のもとこれを撃退した。この頃から敵の銃声が次第に減少する傾向が見え始めたので、聯隊は寺田・大橋の將校斥候を先遣させ、23時30分、果敢な夜間追撃に移り、旅団司令部もこれに続行した。

先に本道南方に迂回した第二、第三大隊の尖兵中隊であった第七中隊は、上方鎮を占領していたが、先刻逆襲してきた敵戦車三輛が、再び本道上を反転してきた。第七中隊及び第三大隊の一部は、暗夜を利用してその二輛を捕獲し、さらにトラック一輛を奪った。

この頃、山下村方向から三々五々、上方鎮部路に向かい退却する敵が、上方鎮を占領していた第三大隊を友軍と誤り、不用意に接近してきた。わが將兵は不意にこれを襲い、白兵戦で約八十名の敵を倒した。聯隊は上方鎮において第三大隊を本隊に編入、その兵力約三百、上方鎮―光華門道を南京城を目指して進撃した。時に空は漆を流したように暗く、一方南京方面の空は赤く映え火災が起こっているのが望見された。

まっしぐらに南京に向かうわが聯隊を、友軍と誤り混入してくる敵兵と白兵戦を交えながら、彼我入り乱れて並行追撃の状況となった。高橋門付近においては、一部の敵が抵抗を試みたが、わが將兵は白兵をふるって急襲突破した。沿道の家屋内には焚火が燃え残り、ところどころ火災を起こしており、敵の狼狽ぶりを思わせた。

七連橋に迫るころ、中国軍兵營の方向から、盛んにラッパの音が響き渡ったが、これは敵の非常呼集らしき思えた。旅団司令部は七連橋に停止したが、聯隊は、巡二無二突進をつづけ、9日午前5時15分、遂に目指す光華門正面のクリークの線に進出した。この時、道路片側の街灯が一斉に点灯され、城壁上からは盛んに照明弾が発射されて猛烈な一斉射撃がはじまった。

師団の諸隊も相前後して馬鞍山系から追撃に移り、9日払曉には、

- 歩兵第三十五聯隊は中山門東南方陸軍兵營の前面、
- 歩兵第七聯隊は工兵学校前面、
- 歩兵第十九聯隊は、わが聯隊の左、上方門の敵を撃退して武定門正面に進出して、それぞれ当面の敵にたいし、攻撃を続行中であつた。

▼安川定義氏の証言(歩兵第十九聯隊第一大隊本部附軍曹、少尉候補者22期)

聯隊は師団本隊として12月8日、索蒙鎮の前面に進出した。当面の敵は淳化鎮(南京の南東約二十五キロ)付近に堅固に陣地を占領し、歩兵第三十六聯隊が、前日米攻撃中であつたが、聯隊は「直ちに左第一線に展開し、当面の敵を撃破し、本道南側地区を南京武定門に向かい進撃すべき」命令をうけた。

折りから潰走しつつある敵を追撃、引き続き各所の陣地に抛る敵を撃破して前進し翌9日午後2時頃、曾家門南方高地の敵を撃破、雨花台砲台を防衛する重畳した陣地帯に遭遇した。激戦の末、12日午前この陣地を占領し、引き続き武定門に進出すべき好機であつたが、「光華門攻撃中の歩兵第三十六聯隊を増援すべき」命令をうけた。

聯隊は、当面の敵を第百十四師団に譲り、戦死者を收容して12日午後2時頃、城外飛行場ついで七連橋付近に兵力を集結した。8日以来の戦闘で、戦死七十五名、負傷二百余名を生じた。

この雨花台付近よりの転進間、道路付近に点々と敵の遺棄死体を散見した。

南京城内の火災を望見す

▼清水貞信氏の証言(歩兵第三十五聯隊第二中隊長)

聯隊は12月7日より淳化鎮南北に連なる山岳地帯の敵陣地を奪取し、つづいて棲霞山―野道山の陣地を攻撃した。山上から見ると、南京あたりに大きな火の手――中国兵が自ら放つた菜火に燃える南京――。7日から8日にかけて夜間進撃をつづけ、8日未明4時半頃、地雷が爆発し中隊長永見大尉が負傷し、外に二十数名の死傷者を出した。この時から清水中尉が第二中隊の指揮をとることになった。

10日(晴) 午後2時「清水隊は右第一線となり、当面の敵を撃破して中山門に進出すべし」との命令をうけた。中隊は紫金山方面からの激しい銃砲弾の射撃をうけながら、第一線―第二線陣地を突破して、南京城前面の最後の小丘の稜線に到達し、そこで夜を明かした。

野村敏明氏の証言(歩兵第三十五聯隊第二大隊本部附軍曹、のち中尉)

「日本兵がよく放火した」と報じられていながら、これは不可解である。日本軍がこれから利用しなければならぬ建物や、宜撫工作上からも大事な住宅などに放火するなど、とても考えられないことである。

南京城内では、我々が入城する前から火災を起こしていたのである。

12月9日、南京上空の赤焼けの空を目標にして夜行軍中、隊列の一部が地雷を踏み、曹長1名が形もなくふっ飛び、中隊長以下十数名が爆創をうけて後送される。赤く染まった南京上空を透かして、影絵のように看護兵たちが右往左往する姿が、今日も脳裏に焼き付いている。

五、紫金山、中山門外(16D主力)の戦闘 (第十六師団の状況報告)による)

作戦経過の概要

第十六師団は、草場少將の指揮する追撃隊(歩兵三大隊、軽戦車隊、野砲兵一大隊基幹)を先頭として、師団主力は句容―湯水鎮―下麒麟門―南京道に沿う地区の敵を、逐次撃破しつつ12月9日夕、下麒麟門付近に進出し、南京東側外郭陣地に接触した。

一方、佐々木少將の指揮する右側支隊(歩兵第三十八聯隊、野砲兵一大隊基幹)は、本道北方の山地方面より敵の背後に向かい迂回し9日、東流鎮(下麒麟門東北方約五キロ)付近の敵陣地を奪取し、その西方、仙鶴門鎮、紫金山方面に追撃中であつた。

12月10日、師団は下麒麟門―中山門道以北の地区の攻撃を担当し、右翼隊(歩兵第三十三聯隊主力)をもって紫金山を、左翼隊(歩兵第十九旅団主力)をもって紫金山南麓、下麒麟門―中山門道に沿う地区を攻撃せしめ、右側支隊をもって、紫金山北方地区より下関

地の陣地を固守し、城壁にたいする突撃を準備した。

方向に前進し、敵の退路を遮断するように部署した。

各隊間の戦闘地境は次のとおりであった。

右側支隊 五旗將王廟—玄武湖東方五百間

右翼隊 上は右に属す

右翼隊 10日は、本道(含まず)以北

左翼隊 11日以後、二二七・五高地—

明孝陵北端—明故宮東北端

10日、軍の総攻撃開始の命令により、右翼隊の歩兵第三十三聯隊第三大隊(二中隊欠)は、紫金山東端の二二七・五高地を占領し、

第二大隊は16時頃、第一家の三八二・五高地を占領した。左翼隊は、同日馬群付近より紫金山南麓の敵陣地を攻略しつつ、中央運動場付近に進出した。

11日、右翼隊の第二大隊は夜襲により、中山陵東北の山頂を占領したが、左翼隊正面においても、歩兵第二十聯隊が紫金山南麓の重要な支線である西山(中山門東方約二キロ)に突入し、敵の執拗な抵抗と逆襲とを排除しつつ、同地を占領、確保した。

翌12日、右翼隊は勇戦奮闘の後、山頂鞍部の高地を逐次占領し、18時頃、第一家の四八八高地を奪取して敵の死命を制した。左翼隊の歩兵第二十聯隊は、12日夜、遺族学校付近の敵陣地に夜襲を敢行して、これを占領したが、敵兵撤退の徴があったので、一挙に南京城に急進し、13日午前3時10分、中山門を占領した。

右側支隊は11日以来、堯化門南北高地の敵陣地を突破し、岔路口(紫金山北側)、岡下(同北方)付近で優勢な敵を撃破しつつ、13日、下関に向かひ退路遮断に任じた。

このようにして、師団各隊は城外の敵を駆逐、南京城は完全にわが包囲下に陥つた。

第十六師団の戦況報告によると、

上陸以来の戦死傷者総計、二一九四(うち将校八八)、戦死者合計五〇五(うち将校三〇)敵に与えたる損害、五万を下らず。

(注、敵の損害は概数にして不正確)

主要なる獲獲兵器、重砲一二、野山砲一二、迫撃砲六〇、高射砲二四、機関銃二九〇、軽機関銃二五〇、小銃四五〇〇、戦車三、その他小銃弾薬等多数。

紫金山の占領 (第十六師団司令部副官、宮本四郎氏の遺稿)

紫金山は歩兵第三十三聯隊が、12月12日午後3時ごろ占領した。この紫金山の攻撃には直協砲兵大隊はもちろん、軍直砲兵も集中砲火を浴びせ、敵の紫金山維持を不可能とした。我が歩兵は敵前百メートルまで近接して、突によく戦った。

日露戦争の遠陽会戦では、首山堡において彼我十五メートルで戦ったという戦史講話を、現地でも聞いたのが印象的であったが、紫金山の百メートルは西部劇なみの近接戦闘である……。

この戦いで、わが師団の戦死者は予想より少なかったが、目立ったことは幹部の犠牲が多かったことである。歩兵第三十三聯隊の如きは、南京攻撃が終わった時には、出征時の中隊長は一人も残らなかった。私はこの状態をみて暗然とした。

出征以来僅か四カ月、日露戦争で旅順を落としたのは、未教育の補充兵であり、奉天会戦以後は、人員補充が跡切れ苦境に立った。日露戦争後は、その教訓によって補充体系が整備されたはずなのに、前途は容易ではないと痛感した。特科も砲兵・工兵とも、中隊長が各々一名戦死した。

馬群—中山門間の戦闘 (戦車第一大隊第一中隊長、城島越夫氏の証言)

城島越夫氏は「戦車第一大隊史」編さんのため保管されていた戦時詳報、作戦命令、戦闘経過要約(等の資料)を基にして当時の本部附軍曹(今の准尉)草場康爾氏、戦車長の村岡寅氏、榎勝春氏、野村達男氏、操縦手の伊牟田真雄氏、車外員隊の落合清吉氏などから三十二項目にわたる証言を集めて検討されたものである。

戦車第一大隊(大隊長岩仲義治大佐26期)は、第十六師団の追撃隊に協力して所在の敵を駆逐し、橋梁・道路を修復しつつ、句容—湯水鎮—麒麟門—中山門道を南京に向かって急進した。

12月10日朝、戦車第一中隊は麒麟門を出発し、馬群東側および西側後線のトーチカ陣地(約二、三千、迫撃砲五ノ十門)を制圧し、道路上の障礙や地雷を工兵と協力して排除しながら前進し、同日夕刻、孝陵衛部落下の前面に到着した。歩兵第二十聯隊の第一線が進出しないので、道路両側地区で厳しい警戒態勢をもって夜を明かした。

翌11日、歩兵第二十聯隊第三大隊は、孝陵衛西側後線の陣地に拠る約七、八百の敵にたじ、砲兵の支援射撃をうけて攻撃し、戦車中隊はこの戦闘に協力した。孝陵衛部落下には戦車阻絶の障礙物があったが、敵陣下で工兵と協力して排除しつつ前進した。しかし、紫金山南麓の歩兵第九聯隊方面の戦況が進展しないのでその後の攻撃前進を抑制して同高地線で一時的機轉することとなった。

当時、第九師団の右翼、歩兵第三十五聯隊の右第一線は、既に南京城の城壁前面に進出していているという情報があった。

12日、歩兵第二十聯隊第二大隊に協力して、南京街道両側の敵陣地、遺族学校や病院のある丘の陣地にたいする攻撃を準備した。この敵は総兵力約千五百内外、砲撃門を有するものと判断され、十個以上の掩蓋銃座が遺望され、陣前には一線の鉄条網があり、散兵壕、交通壕が縦横にめぐらされていた。

戦車第一中隊は、歩兵第二大隊とともに翌13日払曉、この敵を攻撃する計画であった。

このころが、12日午後から紫金山方面の戦況が急速進展したため、前面の敵は夜暗を利用して退却をはじめたのである。この状況を察知した歩兵大隊長は、13日午前2時頃、第七中隊の一部および第八中隊主力に前進を命じ、大隊主力は午前4時頃出発して中山門に向かひ急進した。

戦車第一中隊は夜が明けた午前7時15分頃、中野准尉の軽装甲車斥候を先発させ、中隊主力は7時30分すぎに前進を開始した。午前8時30分頃、中山門に到着したが、中山門到着とともに第九師団に配属を命ぜられた中隊は、土義隊が排除作業中であつたが、少なくとも二ノ三時間を要する状況であつたので、作業が終わるまで城門外で待機した。当時の戦闘経過は次ページ要図のとおりである。

城島中隊長の回想

馬群—中山門間においては、歩兵の先頭部隊と一緒に戦闘しましたが、道路の近傍では敵の遺棄死体は、ほとんど見受けませんでした。敵は勝手を知った陣地内のことですから、夜暗を利用して死体を収容したのではないでしようか。

後続部隊が進出してきた頃には遺棄死体があつたかも知れませんが、街道両側の敵兵力は五千内外と推定されますから、馬群—中山門間の遺棄死体三万三千なんて、まったく白髪三千丈です。

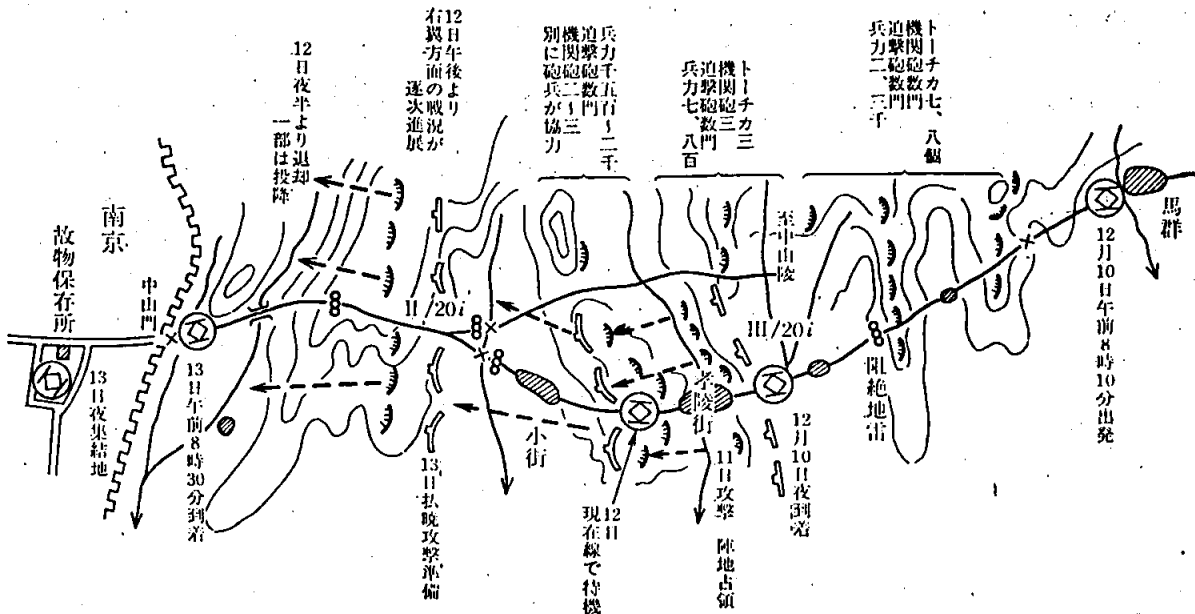
住民とくに婦女女子などは、戦場には残っておらず、早くから退避していたと思えます。

中山門占領前後の状況 (歩兵第二十聯隊第三中隊長、森英生氏47期の証言)

中山門占領前後の南京攻略戦の真相については、福知山聯隊史(昭和50年刊行)および、歩兵第二十聯隊第三中隊史(昭和57年刊行、大小田衛生兵編集)が詳しく伝えていますが、次の点に注意を要します。

「聯隊史」は当時、中山門を占領した中隊の將校、准尉ら四名が中心となって編集したもので貴重な資料ですが、精粗が目立ちます。「中隊史」は隊員の要望によってつくられたもので、権力修飾をさけて真実を伝えるよう努力しましたが、全般の状況把握が不十分です。

馬群～中山門、戦車第一中隊、戦闘経過要図 (12月10日～12月13日)



とくに、南京 ことは今日でも鮮明に記憶しております。

攻撃は逐次戦闘 加入の形式で、

私の中隊は尖兵 中隊である第四

中隊(坂中尉) の右に出て、第一

線となり、その まま攻撃前進し

ました。

地形が複雑し っており、西山高

地を攻撃した第 四中隊の状況は

わかりました

が、他の部隊の 記憶は全然あり

ません。大隊本 部の位置さえわ

からず、右には 友軍がおったは

ずですが、一緒 に戦ったような

記憶がありません。居れば歩兵

第九聯隊でしょ

うが、第三大隊 長代理の森王隊

43期氏は、それ は第三大隊であ

らうといってお

られます。

私は日記をな

くし、「中隊の 記録」も記憶だ

けで書きました

ので、局部的で 誤認もあろうと

思います。しか し、生死をかけ

た戦場のことで

すから、重要な

山門一番乗りは35iだと発表されました。

南京攻撃の細部は省略しますが、16D正面

において、敵は紫金山から西山一帯にかけて

堅固に防禦陣地を構成し、わが聯隊は左翼隊

となつて西山を攻撃しました。西山は、中山

門外約二キロにある丘陵で、敵にとつては首

都防禦の最後の復郭でした。

私は12日夜半、戦線が静まった頃、大隊長

から「中山門には敵は居ないようだから、斥

候を出して占領してはどうか」といわれたの

ですが、当時は四方城(西山の西方)を薄暮

攻撃して占領し、陣地確保、負傷兵の収容中

右に偏していたので、大隊長の好意的指導に

応じなかったことを覚えております。

中山門占領は、聯隊史によると、4時40分

ですが、「第三中隊史」の糸井上等兵の手記

によりますと、「中山門の鉄扉に白墨で昭和

12年12月12日午前3時10分、大野部隊占領

と書かれていた」とあります。この糸井上等

兵の手記は生の記録で明確です。鉄扉の文字

は誰が書いたか、わかりませんが、中山門の

完全占領は「聯隊史」の午前4時40分が正確

だと思います。

さて、35iによる中山門の占領の件です

が、私は十年ほど前に、同期生物故者の追悼

録をつくるため、35iの同期生、煙草武君

(旧姓は不破)の遺族に連絡したところ、故人

の実兄から「南京占領直後に送った家信」を

知らされました。それによりますと、彼は35

iの中山門占領を非常に感銘をもつて報告し

ております。

私はこれを見て、びっくりしました。私は

彼と予科の同区隊で突に立派な男でしたが、

このことだけは承服できません。「不破の

奴、なにか勘違いしたんだなあー」ぐらいに

思っていました。このたびの「偕行」誌の

記事です。

それでも私は大した問題ではないと思つて

いました。その結果、「35i」による中山門占領は

あり得たし、事実あったかも知れない」とい

う結論に到達しました。その理由は、

(1) 戦線が相当錯綜していたこと、

南京攻撃は追撃戦末期で、各部隊は逐次

戦闘加入の状態、地形は錯雑しており、

第一線中隊は左右の連繫など考えずに、し

やにむに突進した。

とくに12日頃は、戦線の錯綜が最もひどく、師団の作戦地境あたりでは、他師団の状態などはさっぱり判らないような状況であった。

(2)、中山門には敵が居らず、占領が夜暗であった。

光華門は9Dの脇坂部隊(36)が、激戦の末、10日夜占領したと聞きまして、12日夜には、9Dの右翼第一線の35は、城壁に手が届くところまで進出して、思われず。したがって、いち早く城壁にとりつき城壁に沿って中山門に進出し、あるいは直接城門に向かうことができたと思われず。

以上のことから、9Dの最右翼の35が中山門を占領したことは、あり得ることと推測する次第です。とくに中山門は、戦闘を交えず、無血の夜間占領であったので、占領部隊の判定を困難にします。

【筆者注】中山門占領日時や占領部隊の究明は、今日においては大きな問題ではなく、これを確定することは困難であろう。しかし、巷間「南京大屠殺」論者が、中山門占領日時を誤ったり、「中山門上の惨劇」、「光華門内の悲惨な光景」を、あたかもその現場を目撃、見聞したかのように発表して、事実としているの、敢えて、中山門一番乗りひとつを取っても真相究明というものがいかに困難であるかを例証したまでである。

▼西山付近の激戦 (歩兵第二十聯隊第十大隊小隊長、伊庭益夫氏の証言)
西山は南京東方約二キロ、紫金山の麓にあり、標高約六十メートルの小高い丘であった。敵は首都防衛最後の抵抗隊として、西山一帯に堅固な防禦陣地を構築し、軍官学校生徒の精兵を配置していた。

わが第十中隊は、12月11日、西山の南半部を攻撃目標とし、第一小隊(長、伊庭少尉)を第一線として展開した。友軍の砲撃と機関銃の支援射撃のもとに突撃を敢行し、鹿砦、

鉄条網、トーチカで固められた陣地を突破し、西山頂上を占領して日章旗をひるがえした。そして、敵の逆襲を撃退して同地を確保し、西山一帯の敵瓦礫の端緒をひらいた。

この戦闘で、わが中隊は中隊長古北大尉以下三十名以上の戦死傷者を生じた。

13日朝、わが中隊は軍旗護衛中隊として中山門から入城した。中山門は三つあり、北側の崩れた門をよじのぼり、中山門上で軍旗を奉じて、「世紀の万歳」を三唱した。

▼9日の城外陣地帯の突破 (歩兵第九聯隊第一大隊副官、六車政治氏49期の証言)
師団追撃隊の先頭にあつた第一大隊は、南京防衛の前進陣地「湯水鎮」付近を突破し、12月9日朝から南京街道を、南京に向かって追撃した。この街道は立派な道路で、起伏のある丘陵がつづき、後線を越すたびに、いつ敵から射たれるかと案じながら、手さぐり状態であつた走り前進し、同日夕刻には紫金山

山系の東端に達した。紫金山南北の線に敵主陣地の第一線があるらしい。夜暗を利用して敵陣地に接近して捜索し、明10日私曉を期して敵陣地に突入、引き続いて主峯に向かい突進するという攻撃が計画された。

12月10日、9日夜一晩中、山を越え谷を渡り敵陣地の前面に進出したつもりであつたが、夜が明けると、敵の陣地は我々の後方にある。われわれが敵陣内に深く侵入したため、敵は総崩れとなつて蜂の巣をつついたようになつた。

隣の大隊や聯隊本部の位置がわからず、前も後も、左も右も、すべて敵である。蜂の巣をつきまわしてはいるような戦闘であつた。

戦闘中に突然、歩兵第三十五聯隊の某大隊と称する部隊が、右方から現われて大隊の前面を横切つて行つたり、歩兵第三十三聯隊の某中隊と行進交叉を起こしたりした。10日午後、紫金山の手前の石壁でかこまれた廟のある山(地図上では桂林石房)の敵を

駆逐して同地を占領、混戦のため散り散りになつた大隊主力をまとめた。この頃、前方の奇麗な五重の塔のある峯から、迫撃砲の集中射撃をうけた。

この塔は屋根が瑠璃色の陶瓦で、側壁には唐三彩の黄色の陶板があつたように記憶している。戦友たちが「あの塔に観測所があるからだろ。あの塔を大隊砲で破壊しよう。あれがあるからやられるのだ。部下の人命と塔とどちらが大切か」と騒ぐが、青柳大隊長は「歴史的文化遺産だから破壊してはいけない」と、頑として射撃を許可しなかつた。

そのうちに、前からは迫撃砲、後方からも敵の射撃をうける。振りかへつてみると、後方の山も谷も見渡す限り「胡麻」をまいたように敵兵が点々と見える。われわれが、しがついてはいる石房山も、麓から鉄兜をかぶつた正規兵が攻め登ってくる。下の方から火をつけて「火攻め」にあつた。

私は、この日の午後の戦闘で左上膊、左肩甲部にダムダム弾の盲貫銃創をうけ、大隊には数十人の負傷者を生じた。衛生隊や担架隊は、どこに居るかわからぬ。やむを得ず、当番兵一人を連れて敵中を突破し、たびたび敵兵とぶつかり、逃げまわりながら、夜遅く師団司令部に到着した。衛生隊一ヶ小隊を連れ、夜暗にまぎれて大隊に帰り、死傷者を担架に乗せ、私も一緒に歩いて街道上の野戦病院に入院した。

12月11日と13日、この三日間は、紫金山の山中で激戦がつづき、前日にも増して紛戦様相の山嶽戦がつづいた。私は11日に野戦病院で破片摘出手術、同夜は病院で仮泊。12日、退院を申し出て許されず、夜半独断で脱出して大隊本部に帰

証言資料によると、次のとおりである。

雨花台方面中国側発表の「埋葬死体数」について

雨花台、兵工廠、花神庙(6D・4D正面)

埋葬死体数	死体存在場			計	埋葬日
	埋葬	死	存		
崇善堂	兵工廠	男	女	四八六	四・一八
兵工廠	雨花台	男	女	四八六	四・一八
雨花台	花神庙	男	女	四八六	四・一八
二五七五二	五六七	二九三	二六、六一二	四・一八	四・一八

つた。したがって11、12日の状況はわからぬが、11日夜半には、敵の大部隊が射撃をしなから、野戦病院や軍・師団の後方縦列の間隙、あるいは輜重や重砲の段列の間を横切つて、南京方面に逃走したとのことであつた。

12日は各部隊とくに第一大隊は苦戦し、大隊長は負傷し、中隊長も幾人かが戦死したといふことを、入院してくる負傷兵から聞いた。第三中隊の分隊長増田寅一氏によると、赤尾中隊長負傷、第一小隊長戦死、第三小隊長負傷で、健在は第二小隊長岩崎少尉のみだつたといふ。11、12日の戦闘が、いかに激戦であつたかが、うかがわれる。

12日夕刻、歩兵第三十三聯隊が紫金山の主峯を占領し、わが第三中隊は南麓の中山陵を占領し、翌13日早朝、歩兵第二十聯隊が中山門を占領したのである。

▼佐藤増次氏の証言(第一大隊本部先任曹記)
私は19日頃、大隊副官代理平岡准尉の許可をうけて、一ヶ分隊の護衛を連れて、戦闘詳報の資料作成のため、城外の戦跡を見回つた。中山陵・紫金山中腹玄武湖の南側を縫って城内に掃蕩した。私の踏査経路では、虐殺の跡らしいものなどは見受けず、ただ、城内に通ずる道路付近(太平門か、玄武門か?)で地雷の爆発により、人および馬の屍体が散乱しているのを見た。

これらの遺棄死体が、全部、別々の団体、個人によつて埋葬されたものとすれば、
 男 二六、二三八 子供 二九三
 女 五六七
 (合計) 二七、〇九八
 とする。そのほか、東京裁判証言によれば七千体を処理したという。

中国側発表の埋葬死体数について、次のことは、言明できると思う。

- (1) 遺棄死体、埋葬死体は、戦闘によるものである。
- (2) 紅十字会が兵工廠で処理した四八六体は、藤田清氏(前出)の証言と概ね一致するが、中国軍自身が処理しようとしたものである確率が高い。
- (3) 崇善堂(注2)による埋葬死体数は信じ難い。

崇善堂は二万六千余体を、あの広大な雨花台一帯で捜し回り、約10日間で埋葬したというが、一日の埋葬数は二、六〇〇体以上となる。当時、それだけの作業能力はなからう。

また、崇善堂は4月9日〜18日の間、兵工廠の遺棄死体を処理しているが、これに遅れて4月20日、紅十字会も四八六体を処理しており、重複の感を否めない。

(4) 婦女八六〇人は疑問である。
 雨花台一帯は激戦地帯で、住民は早くから退避し不在であった。

【注1】 紅十字会は、中国赤十字会の外郭の宗教的慈善団体であり、難民の救済事業を管理した。当時、埋葬隊を組織して屍体の処理にあつた。日本軍は入城後約一ヶ月たつて、その処理作業を許可したといわれる。したがつて、入城直後の死体処理は、殆ど日本軍指導による戦場掃除班によつて行われた。

【注2】 崇善堂について、小山武夫氏の証言(当時、上海・南京に特派された従軍記者。戦後、中日新聞社社員、中日ドラゴンズ社長等を歴任、現在中日相談役)「崇善堂は民間の葬儀屋で、南京在動中しは其の葬儀を見かねた。崇善堂の埋葬記録なるものは到底信するわけには参りません。」

南京全城にわたり4月7日から5月1日までの二十五日間に一〇万四七一八人を埋葬したというのですが、一日当たり四一八八人となり、これらの死体をムシロココモなどで包んで運んだと考えられますが、一日に四千二百体近い死体をどのようにして運んだか。

大勢の人力をどうして集めたか、トラックなどなかった当時、荷馬車で運んだとしても数字が大きすぎます。占領後わずか三ヶ月余しか経っていない時期ですから、城内で多数の人力を徴募すること自体不可能に近く、支那馬車も殆んどなかったはずだ。

派遣軍は南京攻防戦後、戦場掃除をやつたはずですが、それを手伝わされた時の己れの便宜のために膨大な数字を挙げたのではないかと、とても推察するしかありません。いづれにしても、崇善堂の埋葬記録は殆んど信憑性なしと言わざるをえません。

【注3】 中沢三夫氏(第十六師団参謀長)は、中国側発表の埋葬死体数を詳しく分析考察しているが(後掲)、その中で、紅十字会・崇善堂の埋葬について、次のように述べている。

「崇善堂、紅十字会共ニ、城内外ノ主人トナリテ埋葬ニ任ジタルガ如ク発表シアルモノ、13年春、日本軍主トナリ、各種支那人団体、多数ノ苦力ヲ使役シテ大清掃ヲ行ヒタリ。
 両者ハ日本軍ト無関係ニ、独自行動シタルトハ考ヘラレズ、日本軍ノ下ニ於テ作業シタルベシ。然レバ、今日両者ガ云フ如キ全般ノ智識ニ通ジタルトハ考ヘラレズ、又、一、別個ニ行動シタルトセバ、愈々全般ノ智識ナシ。
 端的ニ云ヘバ、両者ノ統計ナルモノモ、日本軍ノ処理作業ニ出場セル一部苦力等ノ智識ヲ基礎トシテ、後年作成セラレタルモノナルガ如ク、正確ナル数字トハ云ヒ難シ。」

通済門方面「埋葬死体数」について
 通済門外一方山(光華門南方約二五キロ)の埋葬死体を、崇善堂は、次のように発表している。

場所	死体数			埋葬時期
	男	女	(計)	
通済門外一方山	二八六	四一五	七〇一	四月九日
子山	一六		一六	五月一日

この埋葬死体は、戦闘によるものであり、いわゆる「虐殺」ではないが、次のような疑問があり、信用できない数字である。

(1) 死体数が過大である。

崇善堂が埋葬した死体は、通済門外一方山二五、四九〇体、雨花台一帯三三、六一二(東京裁判証言別開七三、八二六(後掲))と中山門外一馬群三、二二二(前出)、さらに中山門外一馬群別開七三、八二六(後掲)というが、合計九万二千余体となる。

この埋葬死体数は、これだけでも南京防衛軍の推定総兵力を上回る。
 また戦場遺棄死体合計九万余とすれば、南京防衛軍総兵力は、その三倍以上、三十万内外でなければならず、中国側発表の総兵力十五万をも大きく上回ることになるであろう。
 (2) 埋葬能力と埋葬期間に疑問がある。
 通済門一方山の直距離は約二十五キロである。この広大な地域に散在する死体約二万五千体を、二十三日間に埋葬したというから、一日の処理能力は約千体である。しかリトハ考ヘラレズ、この期間中4月9日〜18日の十日間は、また雨花台で一日平均三千体を埋葬したと全般ノ智識ニ通ジタルトハ考ヘラレズ、又、一、別個ニ行動シタルトセバ、愈々全般ノ智識ナシ、これからみると、崇善堂の一日の埋葬能力

は約四千体となるが、小山武夫氏の述べ(前出)にもあるように、当時これだけの埋葬能力があったとは考えられない。埋葬死体二万五千余は過大であり、信用できない数字である。
 「女・子供を含む」数字の疑問
 この方面では女四七五、子供一七六を含んでいるが、崇善堂の発表には、各方面とも三パーセント内外の女子子供が必ず含まれている。便宜的数字操作の印象が強い。

中山門外の「埋葬死体数」について
 東京裁判に提出した中国側の資料によると、崇善堂埋葬隊は昭和13年4月7日〜4月20日の十四日間に、

死体発見場所	死体数		
	男	女子	計
中山門外一馬群	三、〇二	一、二	三、一四
子山	一六		一六

の死体を埋葬したという。
 なお、南京市長・高冠吾氏の証言によると、中山門外一馬群、盤谷寺などの埋葬死体は、三千余という。

▼中沢三夫氏の証言(第十六師団参謀長)
 中沢三夫氏は、東京裁判において、責任者の一人として悲憤の文書をもって、次のように供述している。

「師団の攻撃重点の紫金山正面には、中山陵・明孝陵等がある。これを毀損せずに紫金山を占領するために、歩兵第三十三聯隊は絶えず左側背から射撃をうけ、すこぶる苦戦をした。わが軍は砲兵の射撃はもてるんのこと、歩兵の重火器の射撃は制限したが、これがため同聯隊の攻撃は進捗せず、過剰な損害が生ずることを余儀なくされた。」
 「この方面は南京防禦の重点地区なり。中国軍はこの正面、西山陣地をもって、南京防衛の鎖鑰なり」と称して、軍官学校・歩兵学校教導隊等の精鋭をすくって、この

地区に配備したるものなり。
中島部隊(16D)亦、攻撃の重点をここに指向し、攻防の戦闘きわめて激烈、当時中国軍にありても、中国青年の首都防守に寄せる烈々たる意氣を顯はれたるものなること、尚中国人の記憶に新たるべし。

従って、彼等の死傷莫大なりしは容易に察し得るところなると共に、中国側の指摘する女子・小人が、当時全く介在の余地なかりしこと、自然分明なるべし。
一步を譲り、この女子・小人が戦闘行動に従事せず、純然たる国民の資格において斃したること、今日において尚明かなりと架空する時は、余程時期を後にしたる時に斃したるものにして、当部隊(13年1月中旬北支に転進)と関係なきこと亦自然に明かなり。
なおも、實在を主張せんとせば、戦死者の死体以外、公墓を混入計算しありと、断ずるの外なし。恰も良し、この付近は明の孝陵、中山陵、陣歿将士之墓などを始めとして、庶民の墳墓地帯にあたり、如何やうにも加算し得べし。

「靈谷寺三千体の埋葬死体」について
「中国側の指示する地名に靈谷寺なる名稱あり。事変勃発数年、抗日記念館、革命記念塔、陣亡将士之墓(わが靖国神社的ものならん)等が建設せられしが、その前に靈谷寺なる寺院存在したるが如し。
はたして然りとせば、中国側は如何なる意図をもって、かかる十数年若くは数十年前の地名を用ひんとするや。察するに地名において我を奇襲し、反証を困難にして、わが残虐に一つの多きを加へんとする作爲ならんか。
それはともかくとして、同地所在の死者は同殺にあらずして戦死者なり。
同地は中国軍独立支隊(歩兵学校練習隊・軍官学校生徒)の防禦せし所にして、抵抗頑強、10日朝、曉霧中の銃声のごときは末だ曾て耳にせしことなき程激烈なりしのみならず、南京公路を制する「トーチカ」

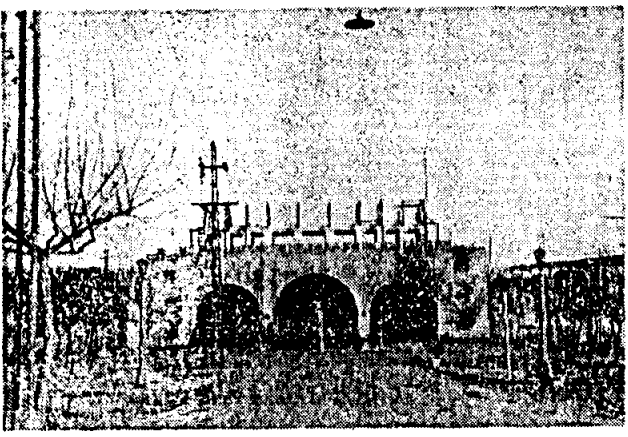
は、出入口を土砂をもって埋没し、最後まで抗戦したるところなり。
10日は終日戦闘し、夜間は中国軍逆襲し來れり。爾後においても、紫金山・中山陵山腹攻撃のため、日本軍の後方拠点となりし所にして、彼等の死傷夥多なりし地点とす。13年夏、日本軍の清掃作業において、付近にありし戦死死体は、土地の縁故によって、ここに集団埋葬されたるべきは想像に難からず。
百歩を譲りて、万一、日本軍虐殺を行ふとするも、靈谷寺のごとき地を選ぶの愚をなすことなるべし。蓋し、同地は寂び寺にあらず、革命記念塔をはじめ、各種の施設ありて南京名所の一つ、参拝遊覧の設備も整い、都鄙群衆の出入多きところなればなり。
師団長は、1月7日美化門部隊巡視の砌、同地を視察したるも、この種強行の跡は、毫も認めざるを得ず。「パス」道路の道標は、常緑樹の林を背にして白色に輝き、正確に指すべき方向を指しめたり。」
「しかして、ここに最も奇異に感ぜられるは、中国側の告示する所在三千といふ数字なり。この数字は、革命記念塔中にある蔣介石の碑文の一に「我党此役殉ずるもの三千人」とある一節に吻合するの一事なりとす。この碑文は、濟南・熱河・上海等における日本軍誹謗の文章たるよりみて、中国側は新にこれらの靈を地下に喚び起し、もつて之に報ひんとする意ならずとせず。しかれども、かくの如きは今日、はなはだ失当の意図たること明かにして、文言を要せざるなり。」

(1)埋葬死体数は誇張である
埋葬死体数三万三千余は、中沢三夫氏、南京街道を進撃した戦車中隊長長城島越夫氏や歩兵第二十聯隊中隊長森英生氏の証言からも、誇張された数であることがうかがわれる。
もしも、中山門外一馬群間に三万三千余の遺棄死体があったと仮定すれば、前掲の雨花台および通済門一方山方面を合算すると、前にも述べたが、さらに南京防衛軍の兵力を大きく上回るようになるが如何であらうか。
(2)埋葬時期が重複し、埋葬能力に疑問がある
埋葬期間が4月7日~4月20日というが、方山一通済門間は4月9日~4月18日と称しており、ほとんどどの期間が重複している。とすれば、崇善堂の処理能力は実に合計一日約五百体でなければならぬ。広地域に散在する死体を捜索し、収容、埋葬することは容易な作業ではない。ブルドーザーもバウシヤベルもない、まったくの手作業である。白髪三千丈の感しきりである。
(未完)

南京事件は虚構である
27期 谷田 勇
私は支那那事変の頭初、昭和12年(一九三七年)12月の南京攻略戦には広く全戦線より諸情報を受集し得た高等司令部に勤務して戦闘に参加した者である。昭和59年(一九八四年)の現在においては、いわゆる南京の大虐殺(南京事件)に関し実見したところを語り得る最年長者の一人でもある。
第一実見した状況から記せば、昭和12年10月上海派遣軍(軍司令官・松井石根)師団長大將の戦線意の如く進展しないのを憂えた大本営は、10月中旬新たに第十軍(軍司令官柳川平助)師団中將、第六、第十八、第一百二十四師団(幹幹)を編成し、中支那戦線に投入するに決した。その時谷田中佐も第十軍参謀に充用されたのである。第十軍司令部は10月27日、軍艦「五十鈴」に搭乗、佐世保軍港を出帆し五島列島沖合において輸送船に搭乗する各師団、特別部隊を掌握し東支那方面を横断し11月5日未明、上海付近の中国主力軍の右側背に迫る杭州湾に敵前上陸を強行した。私事ではあるが谷田は11月1日、黄海上に於て大佐進級の無縁電命を拝受した。初めて戦いに臨む直前、その喜びは大きかったが予期しないことなので、肩章を借用して装着する始末であった。
第十軍の側背進出により、上海方面の戦機は動き、中国軍は西北方に後退を開始した。これに伴い上海派遣軍は太湖東側地域を、第十軍は同西側地域を併列して進撃した。この時大本営は中支那方面軍司令部(方面軍司令官松井大將)を新設し上海派遣軍(新軍司令官朝香宮宮鳩彦王中將)および第十軍をその隷下に置いたのである。
第十軍は敵を追撃して11月19日、太湖西側地域(軍司令部は太湖西南端湖洲市街)に進出し、23日頃には後方部隊を含めて全兵力を集結し得た。南京に向かう進撃に因しては大本営と方面軍との間に若干の応対があったが、第十軍は12月1日南京城攻略の命を受けた同月3日、上海派遣軍と呼应して西北進を開始し、右に第一百十四師団(師団長末松茂治)師団中將、左に第六師団(師団長谷寿夫)師団中將を並列して南方より首都南京に迫った。また第十八師団(師団長牛島貞雄)師団中將をして蕪湖を攻略せしめた。第十軍司令部は12月8日には溧水(南京東南方五〇キロ)に司令部を推進し、第六師団長を召致して攻撃の方途を協議すると共に、敵格なる軍記を維持し誓って非違行為なからしむべきことを要求して誓った。杭州湾岸金山衛より溧水に至る前進間、軍幕係は視界の範囲内に中国軍兵士の死屍は間々発見したが、中国人民のものは殆ど見ることは無かった。
12月12日第六師団は早朝から攻撃前進に移り正午前には概ね中華門を中央として南京南側城壁直前の線に到着した。時に城壁の西南角に近く進出した大分歩兵第四十七聯隊第三中隊(中隊長長三保真大尉、豊後高田市出身)は軍曹安東康文の指揮する決死の兵隊を先遣し扉門に挿さした城壁直前の水壕を渡河し、次に準備した梯子によって城壁を攀登し十二の字が四つ続く12年12月12日午前12時20分(12分を過ぎること僅か8分)壁上に日軍旗を掲げ壮烈な白兵戦の後、午後5時頃城壁を占領した。これぞ正しく南京城壁を確実占領した最初のものである。なお、安東氏

候六名のうち四名は戦死一名は重傷、無事生き残ったのは伍長中津留大伴ただ一人であった。この日柳川軍司令官は早朝秣陵関(南京南方二〇キロ)を出発し、南京城西南方一五キロにある高地頭頂(のち菊花台と命名した)に前進して戦闘司令所を置き眼前に展開する城壁の戦闘を指揮された。随従した幕僚は同時刻城壁上に日章旗が翻翻とひるがえったのを確認している。軍司令官は17日に至り三明中隊に親しく感状を授与しその勇敢を表彰された。

南京市街全般を平定したのは13日であったが第十軍司令部は14日朝、秣陵関を発し雨花台の麓を過ぎ中華門を通って南京城内に進み正午や過ぎ南京路の上海儲備銀行(現在の人民銀行南京分行)に司令部を置いた。雨花台は後年中国側が民衆二万人が虐殺されたと発表した場所であるが中国兵の死体が点々と転っていただけで虐殺の跡というが如きは片



鱗もなかった。司令部が銀行庁舎に落ち着くや、私は午後3時頃、司令部衛兵一分隊を従え車を駆って南京全市街を巡回の途に就いた。街路は既に平靜に帰し住民は断片付に忙し諸所街頭に小児が戯れ、なかなには日本兵から食物を貰い受けているのさえ見られた。ただ南京の埠頭である下関に約千個以上の平服も交じった死屍が横たわり、城西の莫愁湖に若干の水死体の浮かぶのを見ただけで、街頭には全然と書えるほど死屍は存在しなかった。

挿入したスナップ写真2葉は12月14日午後3時前後、下関に程近い挹江門および上海路に於て谷田自ら撮影したものである。 第二部 三角地帯の首定 昭和12年12月17日中国の首都南京攻略に伴う花ばなし入城式(支那方面艦隊司令長官長谷川清海軍大將も参加)が終了するや、中支那方面軍は上海南京周辺の三角地帯指定の命を下し第十軍は第十八師団及び臨時配属せられた第百一師団を基幹とする部隊をもって杭州を攻略することとなった。これがため、第六師団は滞在僅かに一週間、12月19日南京を去り、第十八師団と交代して蕪湖方面の整備に就いた。

杭州攻略は中国軍に戦意なく速やかに撤退したため第十八、第百一師団は26日無血占領し、軍司令部も28日には風光明媚な杭州に入城し、間もなく平穩裡に昭和13年の新春を迎えた。 2月中旬、大本営は中支那方面軍司令部を中支那派遣軍司令部(軍司令官畑俊六大將)に改編すると共に両軍司令部を廃止して各師団を派遣軍の直轄とし、中支方面は警備態勢に移ることになった。私も中支那派遣軍参謀に充用せられたので2月17日杭州を去って上海に移動し、再び各方面の情況を聴取することになった。

昭和12年12月中旬より13年5月に至る南京に於ける日本兵の犯罪は強姦強盗殺人事件が10件近くあり、悉く軍法會議に付せられたむね憲兵および法務部の報告により承知した

が、集團暴行等の報告は無かった。この点、中国側発表の「残虐行為は南京陥落前後一週間を頂点とする」と称するものと傾向において一致するところはある。 第三部 「南京事件」の報道 南京攻略に際し日本軍に残虐な行為があったという風聞はその直後二、三の新聞等によって仄かに伝えられたが、広く日本人が承知したのは終戦後昭和22年東京で行われた極東国際軍事裁判が初めてであり、この裁判で最高指揮官松井石根大將は昭和23年絞首刑に処せられておる。また熊本第六師団長であった谷寿夫中將は南京に呼び出され、詳細な「申弁書」を提出し理路整然と當時の情況を説明し旧部下には非違を犯した者は一名もなく、已れは無罪なるむね訴えたるにかかわらず、激戦の思い出深い南京郊外雨花台で銃殺刑になっておる。

南京事件報道は東京裁判で突如として出現したものでは無くない。外国人で最初に纏まった著書として南京事件を紹介したのは昭和13年マンチエスター・ガーディアン紙の中国特派員ティンパーレー氏の編集した「中国に於ける日本軍の残虐行為」であった、その内容は事件当時南京にいた外国人の書面や手記乃至レポーター等を収集したもので偏見に満ちてゐる。日本人以外の外国人が南京事件を知りようになつたのは著名なジャーナリストであったエドガー・スノーの「アジャ戦争」(昭和16年発行)であつたと思われる。それも南京事件は全文のうち僅かに7ページに過ぎなかつたが、既に日米間の国交が緊張していた折りから世界殊に米国人の眼には「日本軍の狂暴」と映つたのであるうか。

日本人の通信、手記乃至翻つた著書として昭和48年3月発行された鈴木明氏著「南京大虐殺のまぼろし」によるのが最も確実である。鈴木氏は民間放送局に勤務されいづれの政党にも属さない中立公正な方である。鈴木氏は言う。

近代日本の歴史資料を最もエネルギーにかつ系統的に出しているのはみずす書房の政党内にも属さない中立公正な方である。鈴木氏は言う。

発行の「現代史資料」だが、あの膨大な資料の中にも「南京事件」に関する資料は一行も無い。編集部に問い合わせて見ると(実はあるにはあるが)その大部分は東京裁判記録およびそれ以降に出されたものであつて、「同時代の一級資料」は殆どないため取り入れてないとの返事であつた。

「編集部」注)その後、「統一現代史資料」軍事警察に「第十軍法務部陣中日誌」と「中支那方面軍軍法會議陣中日誌」のみが完全な形で収録された。これらの文書については、次号以下で触れる機会があろう。終戦後三十年たった今日、「良心的な告白」などと称して「匿名」で発表しても、これは資料としては殆ど意味はない。加うるにその内容は多かれ少なかれ「極東軍事裁判速記録」と殆ど変わらず、研究者を納得させるものはならん持っていないと考えられた。

そこで鈴木氏は掛類や記録に頼ることを断念し時間と費用を惜しまず散在する歴戦者と南京戦を報道したジャーナリストを捜し出して直接談話を聴取することに決心し全国各地を行脚された。歴訪者の内には既に死亡している人も少なくなかったが、多数の人に面会することができた。

取材の結果を総合すると概ね次の通りである。歴戦者の大部は残虐行為を見たことはないと答えており、「下関で第十六師団が多数の中国兵を銃殺した」と答えた者に「見たのですか」と聞くと、「話に聞いた」と答えている。また数件の「残虐行為」を報道した新聞記者にして一件以外は伝聞に過ぎないと答えた者もあり、同行した他の記者から「あの一件は僕も一緒に見たが、その日は彼が見たはずはない」と否定されるなど、日本人記者の報道もまことにあやふやなものであつたこと鈴木氏は知つたのである。

東京裁判の速記録は谷田も通説したが、中国側の主張は件数も被害人数もまことに過大である。殊に検事側証人として出廷した中国人の内には一人で数個所の非進行行為を見た日述べた者もいるが、当時警備に任じていた日



得るのである。攻略当時南京の人口は軍民合して三十万内外に過ぎなかったと思う。日本軍が三十万を屠れば南京の人口は零となり、四十二万五千人なれば幽霊を殺したことにな。しかるに12月14日午後3時の時点に於てすら市内に多数の住民がおり街頭に殆ど死体を見なかったではないか。私が「虚構」と言う所以である。南京戦参加者である谷田は南京事件の虚構を絶唱して日本陸軍の汚名を雪ぎたいのである。

支那事変における長い経験によれば弱い軍隊ほど、その反動として報復的残虐行為が発生し易く精強な軍隊には殆どない。南京下関を攻略したのは京都の第十六師団であつて、当時の第十六師団長中島今朝吾中将15期は終戦前既に逝去せられていた。されば勇敢な熊本第六師団を率いて南側に戦つた谷中中将が、己れの部下に非道行為がなかつたにもかかわらず、第十六師団長の身代わりとして中国側に処刑されたのではないかと推測し、哀悼の情切なるものがある。

南京攻略前後 補遺

▲寄稿

●前号では、昭和13年1月16日、近衛内閣に「蔣介石政権否認声明」に至るまでの堀場一雄少佐ら政本戦争指導班の動きを原四郎氏の投書により紹介したが、今月は「原田文書」によつてその経緯を眺めてみたい。

ご承知の通り、この文書は当時の元老・西園寺公望の秘書であつた原田熊雄が、その見聞した政界の裏面を自宅の書齋において近衛秀磨夫人・泰子に口述筆記せしめたものである。(「西園寺公と政局」原田熊雄述・岩波書店、第六卷二〇六―二一〇ページ)

△昭和十三年一月十五日は、支那に對して外務大臣(広田弘毅)から日本の申出た大體の和平条件に對する諾否の返事をよこすやうに言つてやつたことについての返事が来る日なのであるが、参謀本部ではその返事が来し拒否された場合にも、なほ五日ぐらゐ期限

を延長して、どうしてもこの際否か成でも慰めたいといふ非常に強い希望であつた。そこでまた十五日の朝から(閣院・伏見) 兩総長宮殿下の台臨を願つて(政府大本營)聯絡會議を総理官邸で開き、朝九時半から午後八時半頃までかかつた。その状況を近衛総理から要すると、次のやうであつた。

支那との間の戦争を中止し、ソヴィエトに對する用意をしたい、といふことを非常に希望した心配してゐるのであつて、参謀次長(多田駿)の如きは「御前會議と言つても、陛下は何事もおつしやらない。あれではまる天皇機關銃のやうなもので、今度は御裁断を仰いで事を決めたい」と言つて、今まで決まつたことを根本から覆して、蔣介石を相手したして平和と局を結びたいといふ様子であつた。しかしもう既にドイツの大使を通して、支那の外交部長(王寵惠)から、「ドイツ大使を通して申出た日本の条件といふのはあまりに抽象的で判らない。もう少し具体的に言つてもらひたい」といふ返事が来てゐる。そこで、外務大臣は、

「もう既に参謀本部あたりからドイツの武官を通してなり、とにかく大體具體的なごちの条件も伝へて、よく知りぬいてゐるにも拘はらず、向ふがとぼけて「まだあれぢやあ判らない」といふやうなことを言つてゐるんでは、とても望がない。どうしても御前會議で決まつたやうに、とにかくこつちは第二段の策に出るよりしやうがない。結局第二段の策、即ち長期抗戦に移して、どこまでも支那に對抗して行くといふ決心を固めなければよくない。」

といふことを主張した。「いつまでも引きずられてはよくない」といふのが総理始め閣僚の意見であつた。同じやうな議論を繰返してゐるが、結局最後に米内海軍大臣は、「それぢやあ参謀本部は政府を僱用しないと言ふのか。政府と参謀本部の對立で、参謀本部が總辭職するか、政府が辭めるかといふことにならぬが……」といふ発言をした。七時頃一応休

憩して、参謀本部側はすべて一応参謀本部に引揚げて相談をし、再び八時頃総理官邸に歸つて来て、参謀次長から、「いま政府が代るといふやうなことはよくない。参謀本部は政府を僱用して政府の決定に同意する」といふことで、結局八時過ぎに議は決まり、再び閣議が開かれた。

閣議後、総理は八時半に参内して、陛下にその経過をすべて申上げて御前を退いた。その時陛下は近衛に、

「実は参謀総長官が来られたから、『どうも早く日支の準備をさう一時も早く日支の準備の間の戦争を中止して、ソヴィエトの出陣に充てたいのか。要するにソヴィエトが出る危険があるのか』とときく、(結局陛下下りの行幸の時の御警備のやうなもので、つまりのことであつては責任者として申訳ないかとおら、できるだけの御警備を申上げるのとおんなじことで、その意味でソヴィエトに對する準備をしたいのだ」といふことを言つてをられた。それなら、まづ最初に支那なんかと事を構へることをしなればなほ上かつたぢやあないか。参謀本部は近衛総理の拜謁より前に、参謀総長官が拜謁をしたといふ希望であつたけれども、自分はいはれば必ず決まつたことをまたひつくり返さなければと思ふんぢやないかと思つたから、(総理と最初に会ふ約束をしてゐるから、それではいけない)と言つて断つた。」

このやうな経緯について、木戸(文部十士臣)も近衛も、

「参謀本部の平和への切なる希望は、どこまでも尤もだけれども、しかしこのまゝで事を起してしまつてから、中途半端のまゝ、ななでも向ふに引きずられ、結局まるで吹返して戦國のやうな態度で、こつちからわざわざ腹を見せた条件等を出して、『これで諾否はしたらどうか』といふやうなことは、今日口にする連戦連勝の國の側から示すべき態度ぢやあない。そんなことをすれば結局、『日本はは

たては断言できないが、果次にわたる中国側の発表および極東軍事裁判に於て中国側の主張する犠牲者、あるいは四十二万五千名、あるいは三十万名と称するのは絶大な数字の誇張であつて、総括すれば略構的虚構と称し